

Title	『紅楼夢』研究における脂評の位置づけ : 甲戌本と 庚辰本にみえる脂評を中心に
Author(s)	王,竹
Citation	中国研究集刊. 2013, 57, p. 61-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58687
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『紅楼夢』研究における脂評の位置づけ

|甲戌本と庚辰本にみえる脂評を中心に|

竹

王

究がなされることはほとんどなかったのが現実である。 説全体の思想を明らかにしようとすること、換言すれば てはやされ、脂評本をめぐって創作過程や小説の題材 れた多くの脂評を深く研究することである(注2)。ところ それは脂評の位置づけが正しくなされていなかったこと 脂評を深く理解することによって『紅楼夢』の思想的研 時代背景などを研究することが盛んで、脂評を用いて小 が、『紅楼夢』研究ではもっぱら版本や曹家の考証がも りとなるのは、脂学―― -脂硯斎という人物を知り、残さ

最も重要なことである」(注3)というように、 手法と潜在的な思想を解明するのは、 いみじくも鄧遂夫が「脂批によって小説の独特 脂評本研究 脂評の内容 この表現 の中で

によると考えられる。

はじめに

べたように、『紅楼夢』研究にとって最も大きな手かが の生涯などをめぐる研究が主流であった。 では、版本やその続作、あるいは小説の成立過程や作者 かにする曹学の四ジャンルに分類される。ただ、これま 族を研究し曹雪芹の思想がどのように育まれたかを明ら し原著の精神を明確にする探逸学、曹雪芹および曹氏一 論を中心に研究する脂学、失われた八十一回以降を探究 よって原文の文字や文体を回復する版本学、脂硯斎の評 すでに拙稿 周知のように、『紅楼夢』研究は、版本の比較研究に 「『紅楼夢』の思想的研究序論」(注1)でも述

を明確にする。

「紅楼夢」研究における脂評の位置づけ検証しながら、『紅楼夢』研究における脂評の位置づけ辰本(注4)にみられる脂評を取りあげ、それぞれの意味をとって極めて重要である。そこで、本稿では甲戌本と庚を詳細に検討することこそが『紅楼夢』の思想研究にを詳細に検討することこそが『紅楼夢』の思想研究に

一、甲戌本にみえる脂評二条

評 第八回、 があった。ここに記された「甲戌」(一七五四年)に因 論を加えた時もなお、 他の早期抄本には見られない脂評「至脂硯斎甲戌抄閲再 の十六回分しか残存しないものであったが、第一回 石頭記』の転写本を入手した(注6)。この写本は第一回~ んで、後世これを「甲戌本」という。 仍用石頭記 九二七年、新紅学(注5)の創始者胡適は 第十三回~第十六回、第二十五回~第二十八 (甲戌の年に脂硯斎が書き写して再び評 書名に「石頭記」を用いている)_ 脂 硯斎重 同

概括している。 起」と題する一文を寄せ、甲戌本について以下のようにて、胡適は「影印《乾隆甲戌脂砚斋重评石头记》的缘頭記』と題して台湾商務印書館から出版されるにあたっ頭記』と題して台湾商務印書館から出版されるにあたっ一九六一年、その影印本が『乾隆甲戌本脂硯斎重評石

続作は全く曹雪芹の残稿を基づくものではなかった。

立つ資料も少なくない。例えば、第二十八回の脂 していたと考えられる構想などを考証するのに役に には、散逸した後半の内容、あるいは曹雪芹が予定 原文より四、五ページが少なくなった」。また、 の提言があり、ようやく「天香楼の秘事を削除 後、「(秦可卿を)赦してあげる」という【脂硯斎】 天香楼」であったが、【曹雪芹】がこの回を完成した にみえる第十三回の作者による原題は「秦可卿淫丧 できる重要な資料がある。 すること、『紅楼夢』最初原本の状態などを知ること があり、それらの中には曹雪芹の家の事、卒年に関 朱筆の眉評、 いものだからである。この写本には、すべての回に 尋常ならざらん」。これらは通行の鈔本、 詩の最後の一句に「字字を看るに血なり、十年辛苦 こと、脂硯斎自ら題した七言律詩があること、 てきた。それは本文の前に四百字の「凡例」がある ……私は甲戌本を『紅楼夢』最古の写本だと指摘 て大いに力となる」などからみると、 る」、第二十七回の脂評「その後、 後の回には琪官と襲人は共に最後まで宝玉に仕え 夾評、小さな字で書き付けられた評語 例えば、第十三回 紅玉は宝玉にとっ 高鶚の四十回 刻本にはな 【脂評】

脂評は他のすべての鈔本より多い。い。甲戌本は十六回残存するのみではあるが、そのまた、甲戌本の脂評の量より多い鈔本も存在しな今日まで甲戌本より古い鈔本は発見されておらず、

価値が高い『紅楼夢』の写本である。今日に至るまで、この甲戌本が最も古く、かつ最も

宝卿, 页。 半部预定的结构, 稿本的状态,如第十三回作者原题 芹的家事和他死的年月日 本, ……我指出这个甲戌本子是世间最古的《红楼梦》 行的钞本刻本所没有的。 小字密书, 其中有极重要的资料, 前面有 "字字看来皆是血, 后来 评语里还有不少资料, 得同始终"(二十八回评), "姑赦之" 才 "凡例"四百字,有自题七言律诗, 如云, "琪官后回与袭人供奉玉兄 十年辛苦不寻常, 都是流 "删去天香楼事, 此本每回有朱笔眉评 可以考知 可以考知《红楼梦》 ,秦可卿淫丧天香 如云 《红楼梦》 可以考知曹雪 , 红 玉 少却四五 最初 结句 小 后 写

子多得多。

胡適のいうように、甲戌本の発見によって、そこにみ贵的《红楼梦》写本渓。所以到今天为止,这个甲戌本还是世间最古又最可宝

える脂評から以下のことが明らかとなった。

原本に最も近い版本は甲戌本である。

費やした。 一『紅楼夢』の成書には少なくとも十年の歳月を

り。
一
一
一
一
一
一
の
内容と
構想のてかが

縁である。 四番行していた高鶚の四十回続作は曹雪芹とは

五 それぞれの回の脂評が他の抄本より多い。
五 それぞれの回の脂評が他の抄本より多い。
五 それぞれの回の脂評が他の抄本より多い。
たいと考えられていた。

的,

也还没

有

部钞本上面的还没有出现一

一面的评语

有甲戌本那

公多

部钞本比甲戌本更古

甲戌本虽止有十六回,而朱笔细评比其他任何本

直

到今天为止,

红

后有宝玉大得力处;

此皆可见高

鹗续作后四十回,

并没有雪芹残稿作根据2力处。(二十七回评),

胡適はこれらの二文から以下のことを結論した。明適はこれらの二文から以下のことを結論した。である。「至脂硯斎甲戌抄関再評,仍用石頭記」の一文である。「至脂硯斎甲戌抄関再評,仍用石頭記」の一文である。「全脂硯斎甲戌抄関再評,仍用石頭記」の一文である。「全に、本書はまだ完成できず、そのため(曹雪)芹は涙除夕,書未成,芹為涙尽而逝(壬午(一七六三年)の大陰り、書木成,芹為涙尽而逝(壬午)の大路が、お適は甲戌本第一回に上述の通説を覆すにところが、胡適は甲戌本第一回に上述の通説を覆すにところが、胡適は甲戌本第一回に上述の通説を覆すに

一作者は曹雪芹であること。

語っている。

ハルい。
一 通行している百二十回本は曹雪芹の作品ではな

こと(治室)。年(一七六三年)の除夕(二月一二日)であった二 曹雪芹の卒年は壬午の年、すなわち乾隆二十七

四 脂硯斎は実在の人物であったこと。

よって生まれたものであること(#II)。 五 『紅楼夢』は曹雪芹と脂硯斎との共同作業に

が共同で作業を進める創作スタイルであったことを明ら硯斎が「抄閲」して評論を加えるという、作者と評者という経緯――曹雪芹による原稿執筆および修訂後に、脂論を加え、『石頭記』を書名として用いることにしたと茂の年に脂硯斎が『紅楼夢』を読み、書き写し、再び評「至脂硯斎甲戌抄閲再評、仍用石頭記」の一文は、甲

を書名とする決定に脂硯斎も直接関わっていたことを物すでに創作活動に参与していたこと、そして『石頭記』さらに、「再」と「仍」の二文字は、甲戌本以前、あるかにしている。それは前例のない斬新なものであった。

このようにいえば、作品の題名が『紅楼夢』であるかという議論になりがちだが、それは『石頭記』であるかという議論になりがちだが、それは『石頭記』であるかという議論になりがちだが、それは、曹雪芹が当初から脂評と小説は一体であると考えたは、曹雪芹が当初から脂評と小説は一体であると考えたは、曹雪芹はそれを承けてさらに推敲していたこと、そのため、書名は「紅楼夢」でも「石頭記」でも「お破斎重評石頭記」でなければならないという曹雪芹の真意を読み取るべきであろう。

演義』の批評も、一見脂評と同じように見えるが、実は聖嘆による『水滸伝』の批評も、毛宗崗による『三国志に先立つ『水滸伝』や『三国志演義』にもみられる。金ところで、脂硯斎の脂評のような評論は、『紅楼夢』

対して、脂評は創作と深く関わっており、彼らの評論とり、作者とは全く無関係に生まれたものである。それにられた評論にとどまる。すべて個人的なコメントであ書かれたものであって、あくまで一読者の立場から加え全く異質である。金聖嘆と毛宗崗の評論は作者の死後に

は根本的に違う(注12)。

ず、金聖嘆のような個人的なコメントを加えることで満 価値を否定しているかのようである。 論としてさえ成功していないと、まるで脂評そのもの 足し、評者としての立場を守っていただけであるとい が。)」(注13)と、 あろうと想像される。(尤もその評も、個人的感傷に溺 とで満足し、 れた嫌 加筆はなされることなく、 ところが、伊藤漱平は「脂硯によるほしいままな本文 さらに、 いがあり、 評者としての分際をかなり忠実に守ったで 脂評は「個人的感傷」に浸ったもので、評 脂硯斎は小説本文に手を加えることもせ 批評としては成功しなかった 彼は金聖嘆ばりの評を施すこ \hat{O}

に、「脂硯斎は『紅楼夢』の作者と同時代人であったば彼らの評論と作品とは無関係である。周汝昌もいうよう品名を『三国志演義』と決めたわけではない。ましてや伝』としたのではないし、羅貫中もまた毛宗崗と共に作伝』ともそも、施耐庵は金聖嘆と相談して書名を『水滸

毛宗崗とは全く違う。
に協力者でもあった」(注意)のだから、脂硯斎は金聖嘆やた協力者でもあった」(注意)のだから、脂硯斎は金聖嘆やしていたうえ、みずから作者の執筆活動に直接かかわっならず、脂硯斎は『紅楼夢』の創作過程をくまなく熟知かりか、作者とも昵懇の間柄にあった縁者であり、のみかりか、作者とも昵懇の間柄にあった縁者であり、のみ

正とはできない。

「おうとしていたこと、それとなく暗示した。要でいることなど、読者にヒントを与えるものである。要でいることなど、読者にヒントを与えるものである。要がはかりか、作者の真意も作品の背景も正しく読み解くいばかりか、作者の真意も作品の背景も正しく読み解くいることはできない。

て創作過程を反映していると理解してよい。の原稿に近いものであるから、作者の考え、真意、そしな脂評が附せられている。その原文と脂評は最も曹雪芹な脂評が附せられている。

・ 庚辰本にみえる脂評四条

『脂硯斎重評石頭記』の抄本を発見し、すぐさま購入し伯の親戚・徐星曙は、北京の隆福寺で甲戌本と同題の(一九三二年)、新紅学の代表的人物のひとりである兪平(湖適が甲戌本『脂硯斎重評石頭記』を入手した五年後

て胡適に知らせた。

次には「内缺六十四回、六十七回(第六十四回と第六十 は二回に分ければよい)」の批語が、また、第七冊の目 本」と呼ばれる。各冊の表紙には「脂硯斎凡四閱評過 の表紙に「庚辰秋定本」の一文があったことから「庚辰 一冊の第十七回のはじめに「此回宜分二回方妥(此の回 、脂硯斎凡そ四回閲読評価したもの)」の一文があり、第 それぞれ十回から成るこの版本は、第五冊以降

つで、この時点では甲戌本に次いで二番目に古い写本で この庚辰本もまた『脂硯斎重評石頭記』 の転写本の一

5

七回は欠)」の一文があった。

以下のことが明らかにされた(注15)。

ある(産5)。そして、胡適や周汝昌の考証・研究によって

几 回は閲評していた。

脂硯斎は庚辰(一七六○年)までに少なくとも

. る 庚辰本の脂評の一部には署名と年代が記されて

几 笏叟・畸笏老人) 署名は脂硯 梅渓と松斎の批語は各一条、いずれも甲戌本に (脂硯斎)・梅渓・ の四名である。 松斎 畸笏 一畸

Ŧi. ある場所も内容も同じである(注17)。 甲戌本には一条しかなかった畸笏の批語が、 庚

辰本には畸笏によると考えられるものが六十~七

甲戌本だけにみられる脂批は全九百一条、

庚辰

があることを思えば、七十八回分の庚辰本の脂批は、そ である。たとえば、第十二回には次のような脂硯斎の脂 ない、庚辰本だけにみえる貴重な脂批があるということ の中で最も多い。換言すれば、庚辰本には他の抄本には 庚辰本は幸いにして七十八回あるので、当然のことなが の数だけでみれば甲戌本よりはるかに少ない。しかし、 確かに、わずか十六回分の甲戌本に九百一条もの脂批 その脂批の総数はこれまで発見されたすべての抄本 本、庚辰本共有の脂批は全五百七十三条である。 本だけにみられる脂批は全三百四十九条。 甲戌

批がある。 が、そうでなければ、この本が泣く。 この本の文章、一つひとつの言葉の裏に作者の真意 この本は細やかな心配りをして読むなら許される

は隠されている。

凡看书人从此细心体贴, これこそが正しい読み方だ。 とくと心せよ。この本を言葉通りに読まないこと、 方许你看, 否则, 此书哭

矣。

此书表里皆有喻也。

观者记之!不要看这书正面,方是会看《淮图》。

当寺、貴族でらなて民族)圣香と友もなども見まざまた。といるであるうことを予測していたからである。世に出れば必ず誤解を招き、その結果、さまざまな非難がなら曹雪芹が泣くとの意であるが、脂硯斎が少なからいなら曹雪芹が泣くとの意であるが、脂硯斎が少なからいなら曹雪芹が泣く」とは、作品の真意を読み取ってもらえな

収入が消費に追いつかない没落寸前であった。そのよう 惰な生活を送り、先祖から残された財産を食いつぶし、 な貴族の生々しい実態を描くことは、儒教社会、ひいて 当時、貴族たちは大家族の経済を支えるべき男性が怠 あったと考えてよい。 『紅楼夢』

この脂評は、図らずも大胆にも『紅楼夢』の本質を物語が混をありのままに描けば、一族の裏切り者、社会の反状況をありのままに描けば、一族の裏切り者、社会の反状況をありのままに描けば、一族の裏切り者、社会の反状況をありのままに描けば、一族の裏切り者、社会の反状況をありのままに描けば、一族の裏切り者、社会の反状況をありのままに描けば、一族の裏切り者、社会の反状況をありのままに描けば、一族の裏切り者、社会の反状況をありのままに描けば、一族の裏切り者、社会の反状況をありのままに描けば、一族の裏切り者、社会の反状況をありのままに描けば、一族の裏切り者、社会の危機的は朝廷を痛烈に批判することとなる。儒教社会の危機的は朝廷を痛烈に批判することとなる。儒教社会の危機的は朝廷を痛烈に批判することとなる。儒教社会の危機的は朝廷を痛烈に批判することとなる。儒教社会の危機的は朝廷を痛烈に批判することとなる。儒教社会の危機的は朝廷を痛烈に批判することとなる。儒教社会の危機的は朝廷を痛烈に批判することとなる。儒教社会の危機的は朝廷を加入した。

硯斎の手になると考えられる脂評がある。
また、庚辰本の第四十二回の前ページには、同じく脂

ることとなっている。

を超えている。第三十八回の時点で、小説はすでに全体の三分の

で、作品の構想や章立て、内容まである程度は固まってあったと考えてよい。同時に、この脂評が書かれた時点ら、『紅楼夢』は元々百二十回ではなく、百回前後でに全体の三分の一以上に相当するというのであるか作品の創作に直接関わっていた脂硯斎が三十八回です〜书至三十八回时已过三分之一而有余。

を はある程度の草稿が出来にはほぼ八 大宗小説だとする伊藤の説は妥当ではない。正確にいえ 大宗小説だとする伊藤の説は妥当ではない。正確にいえ が目を通していたところ、なんらかの原因で散逸してしば、『紅楼夢』はある程度の草稿が出来上がって脂硯斎が目を通していたところ、なんらかの原因で散逸してしば、『紅楼夢』はある程度の草稿が出来上がって脂硯斎が目を通していたところ、なんらかの原因で散逸してしば、『紅楼夢』はあれたことも明らかである。従って、「『紅楼夢』は原作者 ものであることは言うまでもない。

曹雪芹の祖父曹寅のことを示す以下のような脂評があが聞こえたころ (只听自鸣钟已敲了四下)」(注20の下には、

さらに、第五十二回の本文「やがて時計が四つ打つの

るためであった。である。本文に「寅」の字を省略したのは諱を避けである。本文に「寅」の字を省略したのは諱を避け案ずるに、「四下」とは寅の刻(午前四時)のこと

雪芹の祖父であることは間違いない(注意)。

按四下乃寅正初刻。寅此样法,避讳也。るためであった。

八四)は康熙二年(一六六三)に江寧織造に任ぜられ、幼少のころ保母として仕えて、父曹璽(一六一九~一六八~一七二一)のことをいう。曹寅の母孫氏は康熙帝がここにいう諱「寅」とは、曹雪芹の祖父曹寅(一六五

二~一七〇五)の第四子曹頫(一七〇二~一七七五)を 三年後に病死した。曹寅の跡を継ぐ者がいないことは 取り組んだ。曹寅の死後、康熙帝は曹寅の子曹顒(一六 亭詩詞鈔』として刊刻したように、積極的に文化事業に い。しかし、曹顒の子であれ曹頫の子であれ、曹寅が の子とも曹頫の子ともいわれるが、いまもって定説は 曹寅の養子とし、その職を継がせた。曹雪芹はその曹顒 を気づかった康熙帝は、曹寅の弟にあたる曹荃(一六六 八九~一七一五)に江寧織造を継がせたが、その曹顒も 韻府』を刊刻に大いに寄与し、また、自らの詩詞を 康熙帝の命を受けた曹寅は、『全唐詩』ならびに 曹璽の死後、 家を南京に移した。代々清朝に仕えてきた曹家であった 曹璽と孫氏が康煕帝の信を得たことにより、 長男の曹寅がその職を継ぐこととなった。 『佩文

てそれが『紅楼夢』の創作にどのように反映しているの曹雪芹が曹寅からいかなる影響を受けていたのか、そして、曹雪芹の家庭背景、教育背景などを管見することがて、曹雪芹の家庭背景、教育背景などを管見することがて、曹雪芹の家庭背景、教育背景などを管見することがいる。曹寅と曹雪芹の関係が明らかとなったことによっいる。曹寅と曹雪芹の関係が明らかとなったことによってそれが『紅楼夢』の創作にどのように反映しているの先に対しているの。

かを究明する手がかりとなる。

その正体は未だに不明である。かつて脂硯斎と畸笏叟と れ は、 父や叔父の代にあたる人物で、 や曹家のことを熟知する者、 ている。すなわち、畸笏叟は曹雪芹の近親者で、曹雪芹 を翻した(注26)。 された靖本(注5)にみえる畸笏叟の批語を根拠にその前言 同一人物だと判断した周汝昌(産産)も、 叟と署名される脂評が少なくない。 の脂評の文体や口調が酷似していることを理由に両者は ところで、 また、 脂硯斎の批語を大量に削除した人物であるともいわ 曹雪芹と脂硯斎の死後に『紅楼夢』の原稿を整理 脂硯斎に次ぐ第二の評者と目されているが 庚辰本には脂硯斎の批語のみならず、 筆者も畸笏叟は脂硯斎とは別人だと考え 世代からいうと、曹雪芹の 脂硯斎と同様に曹雪芹の 評者のひとり畸笏叟 一九五九年に発見 畸笏

評が庚辰本第二十回にみえる。 さて、その畸笏叟が丁亥(一七六七年)夏に記した脂

親族のひとりであろう(注写)。

阅者迷失。叹叹。丁亥夏畸笏叟余只见有一次誊清时与狱神庙慰宝玉等五六稿、被借よって失われた。極めて残念だ! 丁亥夏、畸笏叟五、六回分の原稿を見ただけで、その後、借覧者に私はただ清書していた時に「獄神廟慰宝玉」などの

の五、六回分の原稿は八十一回以降のものである。この宝玉」は八十回にはないテーマである。したがって、こかったために逸したというのであるが、この「獄神廟慰すなわち五、六回分の原稿を借り出したまま返却しな崎笏叟は、誰かが「獄神廟慰宝玉」などの「五六稿」、

脂評から以下の二点を読み取ることができる。

いる。
これは先述した四十二回の脂評の内容と一致してこれは先述した四十二回の脂評の内容と一致してともその一部は出来上がっていた可能性がある。六七年)夏にはすでに構想ができており、少なく六年)夏にはすでに構想ができており、少なく

となった。沿って書き続けたものでもないことも教えてくれること晋雪芹のものでないこと、また、誰かが曹雪芹の構想に恵またる内容に至くない事実から、この服罰に程言本か

三、甲戌本と庚辰本の脂評から管見できる『荘子』

ある。 とその脂評をみてみたい。 が草稿を作成し、 脂評がいかに作者に近い存在であったかがわかる。 説の内容は脂評と寄り添いながらできあがったもので、 作形式から生まれたものだからである。 るという、創作と評論・解読が同時に行われる独特の もなければ、 たのは、 の『荘子』の世界を管見するために、甲戌本第一回冒頭 めに必要不可欠な資料であることを明らかにするためで い。それは脂評が『紅楼夢』の世界を正確に理解するた これまで脂評本のうち甲戌本と庚辰本について言及し 甲戌本と庚辰本にみえる脂評をもとに、『紅楼夢』 なぜなら、『紅楼夢』の創作スタイル――曹雪芹 『紅楼夢』 脂硯斎や畸笏叟の正体を探るためでもな 修正・改定するたびに脂硯斎が閲評す のテキストの真偽を区別するためで 換言すれば、 そこ 創

てかの女媧という神が石を錬成して天の破れを補っのだと告げた】よく味わうと味がありましょう。さのだと告げた】よく味わうと味がありましょう。さみなさん、この小説は何からはじまると思いますみなさん、この小説は何からはじまると思います

て、余った一個を青埂峰の下に棄てたि登る。を精製したが、そのうち三万六千五百個だけ使っ二丈、幅二十四丈の大きな自然石三万六千五百一個「脂評:無稽の意を寓す」というところで、高さ十たとき、大荒山【脂評:荒唐の意を寓す】は無稽崖

列位看官:你道此书从何而来,说起根由虽近荒

【脂評:自站地步自首荒唐。】 细按则深有趣味

?。待在

聞きてこれを悦び、謬悠の説・荒唐の言・端崖なきの辞明話でこれを悦び、謬悠の説・荒唐の言・端崖なきの辞れ話的な物語を設定した。それは女媧という女神が破れて天を補填する時に「大荒山」の「無稽崖」という場所で石を錬成したという話である。言うまでもなく、「大で山」と「無稽崖」は「荒唐無稽」という場所に恵起されるのが『荘子』天下篇の「荘周、其の風をたま現実的な地名である。そして、「荒唐無稽」で真った非現実的な地名である。そして、「荒唐無稽」で真った非現実的な地名である。それは女媧というな神が破れれば、「荒唐の言・端崖なきの辞書が、「荒唐の言・端崖なきの辞書が、「荒唐の言・端崖なきの辞書が、「荒唐の言・端崖なきの辞書が、「荒唐の言・端崖なきの辞書が、「荒唐の言・端崖なきの辞書が、「荒唐の言・端崖なきの辞書が、「荒唐の言・端崖なきの辞書が、「荒唐の言・端崖なきの辞書が、「荒唐の言・端崖なきの辞書が、「荒唐の言・端崖なきの辞書が、「荒唐の言・端崖なきの辞書が、「荒唐の言・端崖なきの辞書が、「荒唐の言・端崖なきの辞書が、「荒唐の言・端崖なきの辞書が、「荒唐の言・端崖なきの辞書が、「荒唐の言・端崖なる。」というない。「「荒唐の言・端崖なきの辞書」というない。」というない。

る(注30)。 会の欺瞞を暴き、 所に「巵言」「重言」「寓言」の手法を駆使して、現実社 曹雪芹は冒頭から「大荒山」と「無稽崖」を設定し、 界に目を向けることの重要性を語っている。すなわち、 はとりとめない言説 を以て、……巵言を以て曼衍を為し、重言を以て真を為 に操って、一面的な物の見方を揶揄し、「巵言」「重言 の最終篇で、 し、寓言を以て広を為す」㈜スシである。天下篇は (荒唐之言)、はたまた非常識な話(无端崖之辭)を巧み | 寓言」によって自由な精神と真実への探求心、広い世 いわば荘子の哲学の総論である。 人間社会の真実を語ろうとしてい (謬悠之說)やオーバーな言い回し 『荘子』 『荘子』

稽」の意が託されていると評して、もし後世の読者が精」の意が託されていると評して、ももろん、『紅楼夢』の立意が『無稽崖」には「無稽崖」を言い出すと、脂硯斎が待っていましたとばかりが、小説は元から荒唐なものだと告げた」と読者にていい、小説は元から荒唐なものだと告げた」と読者にていい、小説は元から荒唐なものだと告げた」と読者にていい、小説は元から荒唐なものだと告げた」と読者にていい、小説は元から荒唐なものだと告げた」と読者にていい、小説は元から荒唐なものだと告げた」と読者に下いい、小説は元から荒唐なものだと告げた」とばかりである。また、曹雪芹が「大荒山」と「無稽崖」の意が託されていると評して、もし後世の読者が問いた。

するための一助としたのである。ることができなくても、脂評は作者の真意を正確に理解「大荒山」と「無稽崖」から「荒唐無稽」の意を読み取

によっては、ほこである。 これまでの古い小説のしきたりを真に打破する。その非子』、『離騒』を次ぐものである。その筆致はれがこの小説の最初からの本意である。その筆致は『荘子』、『離騒』を次ぐものである。

で、八十回までの多くの脂評が、『紅楼夢』がところで、八十回までの多くの脂評が、『紅楼夢』がところで、八十回までの多くの脂評がある。たとえば、庚辰本第二十五回にみえるる脂評がある。たとえば、庚辰本第二十五回にみえるる脂評がある。たとえば、庚辰本第二十五回にみえるる脂評がある。たとえば、庚辰本第二十五回にみえるる脂評がある。たとえば、庚辰本第二十五回にみえるる脂評がある。たとえば、庚辰本第二十五回にみえるははば遺憾である!丁亥夏、畸笏叟。はなはだ遺憾である!丁亥夏、畸笏叟。はなはだ遺憾である!丁亥夏、畸笏叟。

だと考えてよい。

「懸崖撒手」の四文字は曹雪芹の原稿からの引用その内容の詳細は今もなお知ることはできないが、少な八十一回以降の原稿の内容であることは明らかである。八十一回以降の原稿の内容であることは明らかである。たもので、「懸崖撒手」の内容は八十回にはないので、この脂評は当時すでに散逸してしまった文章に言及し

「懸崖」とは崖っぷちのことで、それは同時に行き止

まりを意味する。断崖絶壁にたどり着くと進むべき道がなくなることを暗示する。この「懸崖」こそ、『紅楼夢』なくなることを暗示する。この「懸崖」こそ、『紅楼夢」なくなることを暗示する。この「無稽崖」を指している。ままがいた場所「大荒山」の「無稽崖」を指している。ままがいた場所「大荒山」の「無稽崖」を指している。ままがいた場所「大荒山」の「無稽崖」を指している。ままがいた場所「大荒山」の「無稽崖」を指している。ままがいた場所「大荒山」の「無稽崖」を指している。ままがいた場所「大荒山」の「無稽崖」を指している。ままがいた場所「大荒山」の「無稽崖」とは人生を捨てる、理不尽な人間社会からけられたという。とは手を離することをいい、さらには出家を持たが、ここでは人生を治った出発点であると同時に、何もかもを終わらせる終着点でもある。

状たり(萬物一府, た場所「無稽崖」に戻って人生を終ろうとする。 と認識し、自らの人生の終わり方として、 人や物、 ことだと荘子はいう。宝玉はこれまで関わったすべての てのものは一つの器の中にあるのだから、 子の哲学思想を再現しているようである。 「死生同状」、生と死とはつまるところ同じことだとする 宝玉のこの死生観は、まるで「万物は 経験した喜びも悲しみもすべて「萬物一府」だ 死生同狀)」(『荘子』 一府、 天地篇 自分の生まれ 生も死も同じ 世の中のすべ 死生は の荘 同

(宝玉は崖っぷちで何もかも手離した)」の内容であろ荘子の死生観に共鳴している。それがこの「懸崖撒手

このように、宝玉の結末に関わる「懸崖撒手」は八十一回以降の内容もまた荘子の人生観を貫いたものであること以降の内容もまた荘子の人生観を貫いたい。すなわち、別路の内容もまた荘子の人生観を貫いたい。すなわち、
「懸崖撒手」というわずか四文字を記しただけのこの脂
「懸崖撒手」というわずか四文字を記しただけのこの脂
「懸崖撒手」というわずか四文字を記しただけのこの脂
「懸崖撒手」というわずか四文字を記しただけのこの脂
「懸崖撒手」というわずか四文字を指すいたものである。

自らが意図していた立意を八十一回以降も堅持しておれぞれ違う角度から『紅楼夢』と『荘子』の世界の関連れぞれ違う角度から『紅楼夢』と『荘子』の世界の関連れぞれ違う角度から『紅楼夢』と『荘子』の世界を色濃く反映していることを告げている。また、大胆にを色濃く反映していることを告げている。また、大胆にも「『紅楼夢』は『荘子』に匹敵する」と評価する脂評も「『紅楼夢』は『荘子』に匹敵する」と評価する脂評は、『紅楼夢』は『荘子』に匹敵する」と評価する脂評は、『紅楼夢』は『荘子』に匹敵する」と評価する脂評を色濃く反映していることを告げている。さらには、散逸した内容に言及している脂評からは、『紅楼夢』は曹雪芹た内容に言及していた立意を八十一回以降も堅持しており、『紅楼夢』は『荘子』の世界の関連れぞれ違う角度から『紅楼夢』と『荘子』の世界の関連れぞれ違う角度が意図していた立意を八十一回以降も堅持しており、『紅楼夢』は曹雪芹に関いた。『紅楼夢』は『紅楼夢』と『荘子』の世界の関連れぞれ違う角度が意図していた立意を八十一回以降も堅持しており、『紅楼夢』は『本学』の世界の関連には、『紅楼夢』は『本学』と『江大寺』と、『江大寺』に、『江大寺』と、『江大寺』と、『江大寺』と、『江大寺』に、『江大寺』と、『江大寺』と、『江大寺』と、『江大寺』と、『江大寺』と、『江大寺』に、『江大寺』に、『江大寺』に、『江大寺』と、『江大寺』に、『江大寺』

のである。
り、最後まで荘子の思想を貫いていたことを立証するも

四、脂評の位置づけ

に不可解である。

回本(程高本系統)がもてはやされたのは事実である。かつて中国で八十回本(脂評本系統)ではなく百二十

楼夢』の真実ではない。 主な理由であろう(キルタ)。しかし、その事実は決して『紅 と、また、何よりも活字本である程甲本の読みやすさが ために「完結した作品」とみなして広く読まれていたこ それについては、氏がいうように、 完」であったのに対し程甲本には四十回の続作があった 脂本が八十回 の

研究成果が生まれなかったのだろうか(注第)。 かわらず、なぜ脂評を駆使して作品の思想性に言及する を緻密に読み解くことの重要性を指摘している。 かりとする他ない」(注38)と、『紅楼夢』研究において脂評 じようという際、……ともかくも現存の脂本をその手が いう場合、あるいは小説家としての曹霑を取り上げて論 さらに、氏は「『原紅楼夢』を問題にして論じようと にもか

なかったことではなかろうか。 必ずしも批評として成功して」いないとする脂評の位置 最大の原因は、 それ故か日本語訳が生まれなかったからでもあろうが づけ(注他)が定着し、 その理由の一つは脂評が難解であったから、そして、 氏のいうところの「金聖嘆ばりの批注が その資料的価値を正しく評価してこ

もちろん、中国においても、「脂硯斎という人物ばか なるたけ低く評価しようとする意見もある」し、 脂硯斎が 『紅楼夢』にほどこした評語 の価値まで

> 実である(注4)。しかし、周汝昌はその間違いについて次 ほどの価値はない」とする否定的な見解があることも事 の戯れの駄文がほとんどであって、とりたてて評価する しかも昔時の《評点派》 評 は「金聖嘆による『水滸伝』評注の亜流にすぎず、 の手になる文章というものは筆

0

ように注記してい

. る

脂

ある(注42)。 から出発すべきでない、というのがわたしの考えで から出発すべきものであって、だんじて抽象的概念 いなかろう。しかしながら、研究というものは事実 してしまう。それもまた脂硯斎研究の一方法には違 いないとか誤認しているとか、たちまちに結論を下 ていない場合には、 点から脂硯斎を評価判断し、現代的な基準に合致し 部の研究者は、 現代のさまざまな理論 脂硯斎は 『紅楼夢』を理解して 見

に対して、 も直接的にも作品に影響を強く与えた人物である。 曹雪芹に寄り添うかたちで創作に深く関わり、 嘆とを同列に論ずることはできないのである。 伝』とはまったく違う性質のものであり、 そもそも すでに「甲戌本にみえる脂評二条」で述べたように、 『脂硯斎重評石頭記』と『金聖嘆批評本水滸 金聖嘆の『批評本水滸伝』は、『水滸伝』の 脂硯斎と金聖 脂硯斎 間接的に それ

正されていないどころか、作者施耐庵との繋がりもまったくなく、あくまで彼自身の趣味的な執筆活動のもまったくなく、あくまで彼自身の趣味的な執筆活動のをしたしたが、脂硯斎はといえば、作者の立場観点とには、準者はとうてなどで者と心情をひとしくし、作者の意図と主張とを貫いで者と心情をひとしくし、作者の意図と主張とを貫いとには、単名はとうてはど作者と心情をひとしくし、作者の意図と主張とを貫きとおした人」(*#48)であるのだから、脂評と金聖嘆がり成書に関わっていないどころか、作者施耐庵との繋がり成書に関わっていないどころか、作者施耐庵との繋がりた書に関わっていないどころか、作者施耐庵との繋がりた書に関わっていないどころか、作者施耐庵との繋がりまったくない。

過ぎないと考える命型。

この点に関して、周は次のようにいう。

創作過程を軽んじた結果ではないだろうか。

も、そうした第三者の手になる一連の作品群から一ぎり、金聖嘆じしん全く「無関係」の第三者だったがり、金聖嘆じしん全く「無関係」の第三者だったわけで、したがって彼の『水滸伝』評本というものわけで、したがって彼の『水滸伝』評本というものたとえば金聖嘆のような人物は、早い話、『水滸伝』たとえば金聖嘆のような人物は、早い話、『水滸伝』

歩も出るものではない(注写)。

によるものであって、作者とは無縁のことである。 それは作者曹雪芹と評者脂硯斎との関係や『紅楼夢』の 因」(注紙)となったという安易な結論を導き出しているが のせっかくの配慮があだとなり、却って敬遠される原 小説に箔をつけかたがた沽れやすくしてやろうとの評者 伝』を比較し、脂評は「金聖嘆ばりの批注」で、 る。それを伊藤は繰り返し『紅楼夢』と金聖嘆評 『水滸伝』とを単純に比較することじたいが筋違い のである。したがって、脂硯斎と金聖嘆、『紅楼夢』 嘆評『水滸伝』と『水滸伝』そのものとは全く無関係な 削除したり評論したりしたことは、金聖嘆ひとりの意思 でも創作に関わった者でもない。金聖嘆が『水滸 金聖嘆は『水滸伝』の作者でもないし、 作者を知る者 :『水滸 伝』を であ

ろう。

まとより筆者はそのことに反論するつもりはない。まあとより筆者はそのことに反論するつもりはない。また、『紅楼夢』研究に大きな貢献をしたことは海外でもに基づく見解であるから、氏が脂評本をテキスト研究とに基づく見解であるから、氏が脂評本をテキスト研究とに基づく見解であるから、氏が脂評本をテキスト研究とに基づく見解であるから、氏が脂評本をテキスト研究として重要な価値があると認めていることも間違いない。もとより筆者はそのことに反論するつもりはない。まもとより筆者はそのことに反論するつもりはない。まもとより筆者はそのことに反論するつもりはない。まして重要な価値があると認めていることも間違いない。まして重要な価値があると認めていることは海外でもして重要な価値があると認めていることも間違いない。まして重要な価値があると認めていることも間違いない。まして重要な価値があると認めていることは海外でもしている。

できなかったからであろう。しかし、『紅楼夢』の思想 評本体の価値を低く評価したために真の意義を十分認識 よって生じた脂評の位置づけの不適切性、 よって『紅楼夢』 曹雪芹の思想を解明することが後回しにされることであ を抜きに語ることなどできないということである。 研究及び曹雪芹の哲学世界に言及しようとすれば、 の評論 とんどなかった。その原因は、おそらく脂評と他 版本研究のための資料として扱うことに終始し、脂評に 評を、脂硯斎とは誰かを考証するための資料、 る。これまでの『紅楼夢』研究では、 すいことで、 本稿はそれに異論を申し立てるのものでもない。 『紅楼夢』研究の大きな問題は、版本論争に陥 ―『水滸伝』や『金瓶梅』の評論との 最も重視すべき小説本体の の思想研究にアプローチすることはほ 種々の脂評本や脂 理解、 換言すれ あるいは あるい 比較 !の作品 Ŕ

おわりに

『紅楼夢』の創作方法は「旧因果律的文学構図」とは全「不合理」へと一歩を踏み出していると言えよう」(注50と、は「旧時代的「因果律」の桎梏を脱し、いわば近代的周汝昌著『曹雪芹小伝』の訳者小山澄夫は、『紅楼夢』

る。 等々の通俗小説と同じように扱うべきではないと考え 楼夢』は『牡丹亭』、『長生殿』、『水滸伝』、『金瓶梅』 合理」な作品であると明言している。筆者もまた、『紅 く異なって、 そして、氏はさらに次のようにいう。 読者に「追体験」と「解釈」を求める 示

る、 認められるからである(注目)。 作者が全知全能の語り手として一方的に「与え」、 作者との緊張関係のもとに作品の のみという旧来の文学構図の崩壊とともに、読者と 読者は無力な聞き手として受動的に「与えられる」 読者による積極的な文学営為の可能性の成立が 《個性》決定され

資料となるのである。 表現されているのか、『紅楼夢』にみえる「巵言」「重 彿とさせる『紅楼夢』が具体的に小説の中でどのように 学営為」を働かせる筆者にとって、『荘子』の世界を彷 することができる小説である。「読者による積極的な文 ながら、 はなく、 えるが、 言」「寓言」に曹雪芹はいかなる意味を託そうとしたの それらを正しく読み取るために脂評は極めて重要な 見すれば『紅楼夢』はごく普通の古典白話小説にみ 積極的に作品の意味と作者の意図を自由に理解 作者との間に一つのコミュニケーションを取り 読者は受け身一方で物語の内容を理解するので 脂評は 『紅楼夢』の創作過程から

> 諸場面の描写に込められた作者の真意にいたるまで、 りを与えてくれるからである。 根底に横たわっている『荘子』の世界を解明する手がか らゆることがらに言及しており、さらには『紅楼夢』の

脂評とともにあるということ、 ることは明らかである。 脂評は読者による作品の理解に大いに役に立つものであ の写〉(描写なき描写)なる側面がある」(注記)のだから、 稿に注釈をほどこした脂硯斎の評する、 尽くされているわけではない。そこに、『紅楼夢』の原 らゆる「心理」や「行為」が、すべて明々白々に説明 ということである。 |確に考察しない限り 小山もいうように、「『紅楼夢』における登場人物の 『紅楼夢』の真の姿は解明できな 換言すれば、『紅楼夢』研究は 脂評を小説の一部として いわゆる〈不写 あ

注

1 正

- (1) 『国際文化論集』 二〇一三年三月 第四十七号 (桃山学院大学総合研究所
- 2 梁归智《石头记探佚》 所収周汝昌 序 П 西人民出

(3) "通过脂批去揭示此书的独特表现手法和潜在的思想艺术内

涵, 石头记》甲戌校本、作家出版社、二〇〇〇年)一四頁 我以为是脂评本的重中之重。" (邓遂夫校订 《脂砚斋重评

- 甲戌本と庚辰本は、 他の写本に比べて大量の脂評が残され
- たため、 最も貴重な版本とみなされている。

5

- (6) "民国十六年夏天,我在上海买得大兴刘铨福旧藏的 三五五頁 重评石头记》残本十六回。(《脂砚斋重评石头记》甲戌校本 录三所収胡适 旧紅学・新紅学については、前掲拙稿を参照 〈影印 《乾隆甲戌脂砚斋重评石头记》的缘起 《脂砚斋 附
- (7)前掲邓遂夫校订《脂砚斋重评石头记》甲戌校本 附录三 三 五五頁
- (8) 程偉元 (一七四二?~一八一八?) と高鶚 (?~一八一五?) とによって整理された版本。乾隆末年、程偉元は寄寓してい 元に協力して『紅楼夢』の補訂作業を行い、乾隆五十六年(一 た北京で『紅楼夢』百二十回の写本を入手した。高鶚は程偉
- 〔9〕"《红楼梦》小说本名《石头记》,作者相传不一,究未知出自 何人,惟书内记曹雪芹先生删改数过。(一粟编《红楼梦卷》

行した。

七九一年)、萃文書屋より百二十回『紅楼夢』(程高本)を刊

10 する。周汝昌《红楼梦新证》一七三頁(人民文学出版社、一 所収程伟元《红楼梦序》中华书局,一九六三年)三一頁 曹雪芹の卒年については、 周汝昌は葵未(一七六四年) ع

九七六年

- 11 けではない。この点に関しては、後述する 脂硯斎以外にも創作に関与した人物がいた可能性はないわ
- (12),脂砚斋的批红楼梦,不用说,和清初金人瑞批水浒、 的批者。(周汝昌《红楼梦新证》)八五三百 砚斋与金人瑞等人不同, 不同。金、毛等人,只是普通读者, 批三国、张竹坡批金瓶梅、 而脂砚斋则不然, 直接关联的; 不过, 他和小说创作过程有极密切的关系, 脂砚斋究竟与金、 他是经过作者本人承认而且写入正文 陈士斌等批西游记这一风气是有其 就读者的眼界发表意见: 毛、 张、 陈一流人有所 毛宗冈
- 13 新漢字に改めた。 伊藤漱平「『紅楼夢』の成立」四五一頁(『伊藤漱平著作集 汲古書院、平成十七年)。なお、 引用にあたってはすべて
- 14 11010年 周汝昌『曹雪芹小伝』三七七頁(小山澄夫訳 汲古書院
- (15) 甲戌本(一七五四年)と庚辰本(一七六〇年) 本発見後に見つかったものである。 たる乾隆二十四年(一七五九年)の写本「己卯本」は、 との間にあ
- 16 樓夢研究論述全編》上海古籍出版社、 胡適 《红楼梦新证》 〈跋乾隆庚辰本《脂硯齋重評石頭記》 一九八八年) 鈔本〉 及び周汝 《胡適紅
- 17 胡適は松斎の批語を二条と断じたが、周汝昌は一条と判断

此种口气可能是松斋第一身说话,但也可能是别人征引或代有两条,但其中另一条云:松斋云好笔力,此方是文字佳处」は、松斎自ら言ったものではなく、別の誰かが松斎の言を引用したもの、あるいは代筆したものとするのが松斎の言を引用したもの、あるいは代筆したものとするのが松斎の言を引用したもの、あるいは代筆したものとするのが松斎の間、近れので松斎のもの、もう一条「松斋云好笔力,此方署名があるので松斎のも方に一条は批語の後に松斎のした。周氏によれば、二条のうちに一条は批語の後に松斎のした。周氏によれば、二条のうちに一条は批語の後に松斎のした。周氏によれば、二条のうちに一条は批語の後に松斎のした。周氏によれば、二条の

(18) 邓遂夫校订《脂砚斋重评石头记 庚辰校本》(作家出版社、

记。() (周汝昌

《红楼梦新证》)八三七頁

二〇〇六年)二〇三頁

前掲『伊藤漱平著作集』

I 五七頁

19

- 用いる。ただし、日本語訳のない脂評は筆者の訳による。(20) 飯塚朗訳『紅楼夢』 □ 一六三頁(集英社、一九八〇年)。
- 跡を継ぐ者は一人息子の曹顒しかいなかったことがわかる。 料》一○二頁 中华书局、一九七五年)の一文から、曹寅の料》一○二頁 中华书局、一九七五年)の一文から、曹寅の料。○二頁 中华书局、一九七五年)の一文から、曹寅の(21) "奴才年当弱冠,正犬马效力之秋,又蒙皇恩怜念先臣止生奴(21)"
- (23) 曹寅没後に生まれた曹雪芹は、曹寅から教育を受けたこと庸《曹雪芹家世新考》(文化艺术出版社、一九九七年)を参照。年)、周汝昌《曹雪芹小传》(华艺出版社、一九九八年)、冯其(22) 以上は周汝昌《红楼梦新证》所収〈人物考〉及び〈史事稽

- と筆者は考える。 と筆者は考える。
- (24)周汝昌《红楼梦新证》所収〈脂砚斋批〉八三三頁~九四〇

頁を参照

- (25) 靖本とは、揚州の靖応賜家の蔵本である。一九五九年、靖(25) 靖本とは、揚州の靖応賜家の蔵本である。一九五九年、靖民に汲却して。一九天四年、毛国瑤は兪平伯と周汝昌にこの版本のことを伝え、「四年、毛国瑤は兪平伯と周汝昌にこの版本のことを伝え、「西丁靖家を訪問して靖本を借閲したい旨を申し込んだところ、原書は既に紛失していたという曰く付きの本で、今も行方不原書は既に紛失していたという曰く付きの本で、今も行方不原書は既に紛失していたという曰く付きの本で、今も行方不原書は既に紛失していたという曰く付きの本で、今も行方不原書は既に紛失していたという回く付きの本で、今も行方不明のままである。刘梦溪《红楼梦与百年中国》三九三~三九五九年、靖
- (26) "第二十二回有一条墨笔书云" 前批 之手, 知者 実は別人であることがほぼ確実となった。すなわち、丁亥の 论。」とあるように、同一人物だとみられた脂硯斎と畸笏とは、 为畸笏亦即脂砚化名。 今有此批出现, 别去,今丁亥夏,只剩朽物一枚,宁不痛杀! 次いで世を去り、『紅楼夢』に深い関わりを持つ者の中で畸笏 (一七六七年) 〈聊聊〉寥寥,不数年, 亦见他本,但独无「不数年……」十六字。笔者过去认 以前、 芹渓 芹溪、 (曹雪芹の別名) と脂硯とが相 脂砚、 则拙说似误。 〈按指前面的一条朱批 此批当出 杏斋诸子, 此尚待细 一畸笏 皆相继

录编 靖本传闻录〉一○五○~一○六六頁) ひとりが残されたのである。(周汝昌《红楼梦新证》所収〈附

(27) 脂硯斎が 「余初看之,不觉怒焉,盖谓作者形容余幼年往事。(27) 脂硯斎が 「余初看之,不觉怒焉,盖谓作者形容余幼年往事。 あ思彼亦自写其照,何独余哉?」(第十七回・十八回)と、曹因思彼亦自写其照,何独余哉?」(第十七回・十八回)と、曹因思彼亦自写其照,何独余哉?」(第十七回・十八回)と、曹因思彼亦自写其照,何独余哉?」(第十七回・十八回)と、曹田根亦作。

(28)前掲飯塚訳『紅楼夢』I 一二頁

ている。

- (29) 『莊子』天下篇 金谷治訳注『荘子』第四冊(岩波書店、一九八三年)二二八頁
- (30)『紅楼夢』と『荘子・天下篇』の関係については別に詳論す
- (31) 前掲《脂砚斋重评石头记 甲戌校本》八三頁
- (32)前掲飯塚訳『紅楼夢』I 一三頁
- (33) 同上
- 東辰本には「丁亥夏 畸笏叟」の署名が付いているものの、(35) この一条の脂評は、甲戌本と庚辰本両方の版本にあるが、楼夢』の研究の大きなテーマであるが、ここでは触れない。(34) 『紅楼夢』全編にしばしば登場する『離騒』や『九辯』も『紅

甲戌本にはない。この脂評は脂硯斎によるものか、畸笏叟に

- しくは畸笏叟によって書かれたものである。えたものか定論はない。いずれにせよ、この脂評は脂硯斎もよるものか、あるいは丁亥夏に畸笏叟が書き写し、署名を加
- (36)伊藤漱平「脂硯斎と脂硯斎評本に関する覚書」五七頁(『伊一一・『甲》』)。・・・『フォファク・る)
- 藤漱平著作集』 I 所収)
- (37) 同上五九頁
- (3)これまでも脂評を使った研究がない訳ではない。しかし、(3)同上六○頁
- するもので、作品の思想性、すなわち『荘子』の世界に言及それらは食文化や服飾、あるいは文学性や仙女崇拝などに関
- (41) 周汝昌『曹雪芹小伝』三七六頁(小山澄夫訳 汲古書院(40) 前掲「脂硯斎と脂硯斎評本に関する覚書」五九頁 した研究成果は皆無に等しい。
- (42) 同上三八四頁の注五

二〇一〇年)

- (43) 同上三七八頁
- 著作集』 I所収) (44) 伊藤漱平「曹霑と高鶚に関する試論」四三〇頁(『伊藤漱平
- (45)前掲『曹雪芹小伝』三七六~三七八頁
- 前掲「脂硯斎と脂硯斎評本に関する覚書」五九頁

46

研究〉(北京图书馆出版社、二〇〇六年)一七六~一九七頁を(47)孙玉明《日本红学史稿》所収〈伊藤漱平在该时段的《红楼梦》

参照。

(48)伊藤漱平訳『紅楼夢』(上)五八八頁(平凡社、一九七三年)

以脂庚本爲主要校本,定爲新本,而以其他各抄本參校之,不版社、一九五八年)の〈校改紅樓夢凡例〉に、「以戚本爲底本,(49)俞平伯校訂・王惜時參校《紅樓夢八十回校本》(人民文學出

得已則參考刻本」とある。

編『中国の古典文学―作品選読』所収。東京大学出版社、一(5) 小山澄夫「紅楼夢」情から不合理へ」三二五頁(伊藤漱平

(51) 同上三二五頁 (51) 同上三二五頁

九八一年)

(81)